

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 19

November, 2009

関西大学ニュースレター
発行日：2009年(平成21年)11月25日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



■新学長就任のことば —5

世界を切り拓く

「考動力」あふれる人材を育てたい。

時代をリードする21世紀型総合学園を目指して
楠見 晴重 学長

■リーダーズ・ナウ —7

在学生— ボランティアセンター学生スタッフ

社会学部2年次生 梅田 麻菜さん

卒業生— 朝日放送アナウンサー 橋詰 優子さん

■研究最前線

リーダーシップについてフォロワーの視点から研究

フォロワーの意識を変化させ 依存しない関係へ —9

商学部 — 小野 善生 准教授

ナノ炭素材料の合成法確立と実用化を目指す

副産物のないナノ炭素繊維の合成法を開発 —11

環境都市工学部エネルギー・環境工学科 — 中川 清晴 助教

■社会貢献・連携事業 / 大学連携 / 産官学・地域連携 —13

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム」に採択

三者協働型アクティブ・ラーニングの展開

—学生の「考動力」育成を目指して—

■関大ニュース —15

大学トップマネジメントフォーラムに楠見晴重学長が出席 ほか

■対談

小野 元之 (独立行政法人日本学術振興会理事長) × 上原 洋允 (理事長)

強みを生かしつつ 世界標準の大学に

「将来は暗くない。アグレッシブな生き方を！」

ONNO

MOTOYUKI



強みを生かしつつ 世界標準の大学に

「将来は暗くない。アグレッシブな生き方を！」

◎小野 元之 ・独立行政法人日本学術振興会 理事長

◎上原 洋允 ・理事長

社会が活力を失い、世界の中でも存在感がなくなっている日本。ピンチをチャンスに変えるカギは、大学教育と学術研究にありと、小野元之・日本学術振興会理事長は語る。教育は人も国も変える。大学の改革と国際化などをめぐる対談から、関西大学の将来像が見えてくる。



◆「日本を、教育行政を変えたい」

上原 関西大学の客員教授・教育顧問・経営審議会委員等を務めていただいております小野先生は、旧文部省時代から文部科学省事務次官を経て日本学術振興会理事長の現在まで、一貫して日本の教育の充実に取り組んでこられました。私は、先生の本学でのご講演をお聴きして、我が国が今後世界各国に伍して発展していく道は教育に力を入れる以外にないと力説されたことに感銘を受けました。先生の教育に対する情熱はどのようにしてはぐまれたのか、というところからお伺いしたいと思います。

小野 私の父親は高校の教員で、その後教育委員会の職員、最後は岡山県の教育長を務めておりましたので、教育現場や教育のあり方には子どものころから関心がありました。高校まではおとなしかったのですが、大学に入ってから少し過激になり、世の中を変えなければいけないという意欲を強く持つようになり、学生運動にも参加しました。京都大学の杉村敏正先生のゼミで、行政法の理論に感化され、きちんとした教育行政をしなければいけないと考えるようになりました。

日本の将来のためには教育が大事なのに、当時の文部省には旧態依然としたイメージがありました。日本を変えたい、良くしたい。もっと柔軟な発想で、新しい時代にふさわしい文部省にしたい。こんな意欲に燃えていたものですから、とても生意気で、激しい議論をしたりして、上司をてこずらせた職員でした。

◆日本の再生は教育に力を入れることから

上原 小野先生は学術振興会に移られてからも、独創的・先駆的研究を進展させる科学研究費の拡充や、優れた若手研究者に対して主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保を図る特別研究員制度、世界トップレベルの研究拠点プログラム、学術の国際交流など、世界を視野に入れた先駆的な学術研究振興策の旗を振っておられます。その背景には、今の日本に対する危機意識が感じられます。

小野 目標と自信を喪失したかに見える今の日本を、どうやったら再生できるのか。どうしたら日本をもっと元気な国にできるのかということを考えますと、資源のない日本はやはり人材の育成で生きていくしかない。過去の歴史をみますと、明治5年の学制発布により初等教育に力を入れたことが日本の繁栄のベースになっていると思うのです。もう一つは、第二次世界大戦後に6・3・3・4制を導入して高等教育の普及に力を入れたことが、国民全体の知的レベルを上げ、敗戦の焼野が原からの復興と発展を可能にしました。過去2回の難局を、その時の政府が教育に力を入れることで乗り越えることができたのです。

今ちょっと心配なのは、国全体が行き詰まっていて元気がなく、この国がどの方向に進むべきか、よく見えていないことです。先進国のお手本を学んで発展しているときには、国民が勤勉で初等中等教育がしっかりしていて、官民一体となって協力し合って伸びていきました。ところが、世界第二の経済大国になって先進国の仲間入りをしたら、目標がなくなってしまったかのようなのです。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』みたいに坂を上っていく段階は、みんな上を目指して必死です。上りきった途端に、少し頑張りも失ってしまいました。戦後60年たって、いろんな制度が疲弊している面もあります。行政や政治が日本の進むべき方向を明確にし、目標を示したうえで、もう一度坂を上ってみる努力をする必要があります。

上原 確かに日本は戦後、再起不能かと思われたような状況から立ち上がって発展を遂げました。しかし、今やアジアの新興国が日本に追い付き追い越せて勢いついています。資源に乏しく人口が少なくなる一方の日本が国際競争の中でどう生き抜いていけばよいか、まさに切実な問題です。やはり進むべき道は、先端科学技術の開発や教育レベルの高さで世界に対抗できるようにする方向ですね。

小野 ええ。今、何を重視すべきかという、私は大学をしっかり支援していくことだと思っています。何も強大な軍事大国になる必要はないわけです。文化の度合いが高く、国民が長生きでき、幸せで生きがいのある日本、環境問題などで世界に貢献する日本というイメージをしっかり作って、それに向かってみんなで努力することです。

アフリカやアジアの発展途上の国々も、日本に倣って教育に力を入れてきています。たくさんの借金があるとはいえ、まだ経済大国として頑張っている日本は、中国やインドをはじめアジアの国々とうまく付き合いつながり、引き続き発展していかなければなりません。

◆感動を与えるような「徳育」の教科書を！

上原 関西大学は来年4月から、高槻市の新キャンパスに小学生を迎え、小学校・中学校・高等学校と一貫した教育を開始します。そこでは、「国際理解力」「情感豊かな心」「健やかな体」を発達段階に応じてバランスよく高め、倫理観と品格を有する「高い人間力」を持つ人材の育成を目的としています。小野先生はご講演の中で、日本の再生のためには「徳育」が重要であると述べておられました。特に小学校や中学校の教育は、家庭と学校が密接な連絡をとって進めなければなりません。子どもが嫌がることであっても、教えずにはいけないことが多くあります。小野 明治以来、日本の国民は道徳性が高く、他国の人に敬意を払い、困っている人がいれば助ける、そういう良き伝統がバックグラウンドとなって、国の発展に大きく貢献してきました。最近の子どもたちを見てみると、やはり大人社会全体でちゃんと教えなければいけないと思うのです。昔はおじいちゃんやおばあちゃんが道徳を子どもに教え諭していたのですが、今の社会でそれは望めません。親が仕事で忙しくて、なかなか子どもの教育にかかわれないということもあります。

そうであれば、学校教育の中で道徳をしっかり教えるべきだ、そのためには教科書にして、感動を与えるような徳育の教科書もちゃんと作るべきだ、というのが私の意見なのです。もちろん反対意見もあります。ただ私は特定の思想を押しつけるつもりではなく、国際社会で羽ばたくためにも身につけていなければならない基本的な道徳を、学校教育でしっかり教えたほうがよいと考えています。

■対談



人間が生きていくには「知」だけではだめで、「徳」と「体」が絶対必要なんです。

小野 元之(おの もとゆき)
1944年岡山県生まれ。68年京都大学法学部卒業、文部省入省。北九州市教育委員会教育長、文化庁次長、文部省官房長などを経て、2000年文部事務次官、01年文部科学事務次官。03年日本学術振興会理事長、04年から独立行政法人日本学術振興会理事長。安倍内閣の教育再生会議委員、21世紀COE・グローバルCOEプログラム委員会委員なども務める。06年レジオンドヌール勲章・シュバリ工章受章。関西大学客員教授。同志社大学客員教授。

上原 今は仏教の精神や儒教の精神も薄れてしまっているから、何を根底にして教育をすればいいのか、道徳的な教典がないのです。先生がおっしゃる徳育の教科書の必要性を感じます。
小野 アメリカやヨーロッパはキリスト教の伝統がありますから、学校が関与しなくても、教会や家庭で宗教を通じて人の生き方が教えられてきました。日本では知育・徳育・体育の三つが大事だと言われているが、「徳」と「体」は隅っこに追いやられがちです。しかし、人間が生きていくには「知」だけではだめで、「徳」と「体」が絶対必要なんです。

◆国際化を図り、カリキュラムを世界標準に

上原 関西大学は昨年10月1日から「教育推進部」「研究推進部」「社会連携部」「国際部」の4部を設置し、戦略的な改革体制を構築しました。少子化と大学間の競争激化の中で、大学の改革についてもご意見をお聞かせください。

小野 18歳人口が減っていくなかで、これから大学がどう生き残りを図るかということは重要な課題です。私が考えていますのは、第一に「国際化」を図ることです。文部科学省も国際化拠点整備事業(グローバル30)という新しいプロジェクトで引っ張ってこうとしています。中国やインドでは経済が発展してきていますが、まだ大学が十分ではありませんから留学希望者が多い。しかし、日本の大学には日本語という言葉のバリアがあります。まず日本語を勉強しないと日本の大学に入れないというのは問題です。英語だけで卒業できるコースや、日本に来てから少しずつ日本語を覚えればよいというカリキュラムなどで、もっと国際化を進めるべきです。

日本の英語教育も改めなければいけません。コミュニケーションのツールとしての英語をしっかり学べるようにして、分野ごとに英語で行う講義を増やす必要があります。

上原 小野先生は、21世紀は知識基盤社会であり、世界から優秀な学生を集めるために、世界標準のカリキュラムにしていかなければいけないとお考えですね。

小野 EUの中ではエラスムス計画のように、国が異なっても単位の互換が可能なシステムができつつあります。現実には、中国やインドの優秀な学生はアメリカやイギリスなどの英語圏に行っています。

日本にやってくる留学生は現在約12万5千人ですが、文部科学省をはじめ関係省庁が協力し、2020年をめどに30万人を受け入れる「留学生30万人計画」が進んでいます。関西大学も、留学生に対して魅力的な大学であることをアピールしていく必要があります。

上原 そのためには、教育内容はもちろん宿泊施設も充実させなければなりません。本学は、今年3月に大阪府の千里留学生会館跡地活用事業コンペに選定され、同跡地を入手しましたので、そこに国際化推進拠点として新たに留学生会館を設立する予定です。

小野 私ども日本学術振興会は、北京やワシントンなど海外10カ所に事務所を置いていて、各大学のランチを本会の海外事務所の中に設けませんかと呼びかけています。単独で外国に事務所を置くのは大変ですから。

上原 確かに、アジアの主要な国に事務所を置いて、そこで交流を図りながら留学生を確保していくことは必要だと思います。

◆「関関同立」の中で安住してはいけない

小野 大学改革の課題の第二は、「連携」です。近隣の大学との連携、高校との連携、産学連携、大阪府や大阪市など地方公共団体との連携、地域社会との連携など。連携することによって、大学単独ではできないことが協力し合ってできるようになります。関大は



戦略的な学部・学科の運営、関西で満足せずに日本の関大、さらに世界の関大を目指さなければいけないと思っています。

関大の強みを生かしながら、関西学院や同志社、立命館、あるいは阪大や京大とも協力して教育・研究を進めていくためには、カリキュラムを一定のスタンダードに合わせるいかねばなりません。

日本の大学の大きな問題点は、卒業生の質の保証ができていないことです。大学に入るまでは難しいのですが、出るときは比較的易しい。4年間で知識、考える力、行動力、意欲などをアップさせ、さらに人間性に磨きをかけて送り出すことができるかどうか。そのためには、教員が自分の研究だけをやっているのではなく、教育にもっと力を入れること、カリキュラムを改革することが不可欠です。

上原 過去には国家権力に対して学問の自由や大学の自治が尊重されねばならない時代もありました。しかし、これからの大学改革には、先生方の頭の切り替えも必要です。競争的研究資金を獲得し、国際的競争に勝ち抜くためにも、良い教育、良い研究が必須です。4年制大学の中でも上位20~30校が、熾烈な争いをしていかなければならない時代となりました。

小野 グローバル化が進んでいますから、ますます世界的な競争になるでしょう。関西大学も「関関同立」の中で安住してられません。理事長や学長のリーダーシップのもと、これが関西大学の強みなんだという特色を明確に示していく必要があります。

◆「アグレッシブな関大生であれ」

上原 先生がおっしゃっている戦略的な学部・学科の運営、関西で満足せずに日本の関大、さらに世界の関大を目指さなければいけないという点は、私もまさにその通りだと思っています。関大をこぞんまりした大学にしてはいけないと、肝に銘じています。

小野 関西大学の卒業生は反骨精神に富んでいて、野性味があり、粘り強く、将来の発展を生み出す力を持っていると思います。やる気があってモチベーションが高く、企業や日本の力になれるという点をさらにアピールし、卒業生の質の高さを保証することが関西大学というブランドを高めていくことにもつながっていきます。「関関同立」の枠にとどまらず、早稲田や慶応にも負けないぞ、という気概を持っていただきたい。

それぞれの学部にも名物教授も各分野に秀でた方もいらっしゃるの、そういう人材を有効に活用するとともに、能力のある方を学部閉じ込めしないで、他の学部の学生も聲咳に接して単位が取れるような全学的なシステムも考えられます。先生方のやる気を喚起し、いい教育、いい研究をしてもらって、さすが関西大学の出身者だという評価が定着するように、そういうビジョンを理事長が強く打ち出されたらよいのではないのでしょうか。

上原 関西大学でなければできないような教育、研究、社会連携、国際化を推し進めたいと思います。最後に、学生諸君に何かメッセージをお願いします。

小野 関大生に限らず若い人たちの多くが、日本は少子高齢化で将来は暗いというふうに思い込んでいます。私は、それは違うと言いたい。現に関西大学で学んでいる人たちが年を取るころには、少数で上質の生活を維持できるチャンスがあるのです。日本は世界の最長寿国であり、豊かで文化のレベルも高く、自由で安全で平和な国なんです。むしろ恵まれていて、将来

は暗くないはずなんです。皆がもっと幸せになるにはどうしたらいいのかを考えて、アグレッシブな生き方をしてほしい。前向きに、世の中をもっと良くしてやろう、あるいは世界に貢献したい、地域のために頑張ってみよう——そういう意欲を持った関大生であってほしいと思います。
上原 バンカラで生き生きとして元気で活気があり、学の実化を目指した実学的な校風を生かしながら、アグレッシブでありたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

関西大学の財産は、一流の資源と総合力。それに人材。

今、世界は100年に一度と言われる国際金融危機に直面し、日本も大きな変化に迫られています。このような時代には、従来のモデルや経験が通用しない出来事が多く起こります。すなわち、自らの頭で考え、自律的かつ積極的に行動する「考動力」が強く求められる時代なのです。今年で創立124年目を迎えた関西大学は、「知」の世紀をリードし、新しい「公共」を創造する力漲る21世紀型総合学園の構築に力を注いでいます。ダイナミックで行動力のある知識人、新たな世界を切り拓くことができる「考動力」あふれる人材を養成する学園として、時代に挑んでいます。

本学の教育理念は「学の実化」、つまり「学理と実際の調和」にあります。この学是を基盤とし、伝統に立脚しつつ、柔軟な姿勢で時代の変化に対応し、日本だけでなく世界のために貢献できるトップランナーの育成を目指し、新たな取り組みを続けていかなければなりません。

また、本学が持つ一流の資源を有効活用し、総合力を遺憾なく発揮することで、教育、研究の質をより向上させ、世界をリードする大学へと更なる発展に尽力することが、学長としての私の使命であると考えています。

第40代学長に就任
— Harushige Kusumi

楠見晴重

世界を切り拓く
「考動力」あふれる
人材を育てたい。

時代をリードする21世紀型総合学園を目指して

楠見晴重(くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。1978年関西大学工学部土木工学科卒業、1981年関西大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。1982年関西大学工学部助手。専任講師、助教授を経て、2002年教授。2007年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。2009年理系出身者初の関西大学学長に就任。学校法人関西大学理事、土木学会フェロー会員、物理探査学会理事、岩の力学連合会副理事長ほか。共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」など。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

ボランティアを通じ、 楽しく自然に“人と繋がる”

学内や地域の人との交流から、
多くのことを吸収したい

●ボランティアセンター学生スタッフ 社会学部2年次生
梅田 麻菜 さん

2005年、関西大学に「ボランティアセンター学生スタッフ」が発足。その目的は、関西大学の学生がボランティア活動に参加するためのきっかけ作り。現在、センターには1~2年次生を主体とする14名の学生スタッフが在籍し、職員とともにセンターの運営事業に携わりながら、『淀川掃除』や芥川の『ミズヒマワリ駆除』、キャンパスの『福祉MAP』制作…と、積極的に活動を行っている。代表の梅田麻菜さんに、その活動内容や想いを聞いた。



梅田 麻菜—うめだ まな
■1989(平成元)年 熊本県生まれ。熊本県立天草高校卒業。社会学部2年次生、ボランティアセンター学生スタッフ代表。

ボランティアセンター学生スタッフは、毎月第1日曜日に『淀川掃除に学ぶ会』主催の淀川掃除活動に参加している。参加開始から今年8月で丸2年。当初は学生スタッフと一般学生合わせて十数名で行っていたこの活動も、現在では多い時で60名も集まる伝統行事へと成長した。

「2年も継続しているので、もう綺麗になってもいいかなと思うのですが、毎回いっぱい出てくるんですよ」受け持つ区域は



ミズヒマワリを駆除する学生スタッフたち

100m程度だが、約2時間の作業でトラック1杯分、ゴミ袋40袋分ものゴミが集まる。小さなゴミだけでなく、タイヤやバイクなどの大型ゴミまであり、作業は一筋縄ではいかない。一見大変そうに見えるこの淀川掃除は、学生に人気があり、うまく浸透している。その理由とは聞くと「淀川という身近な場所、作業は午前中だけという気軽さ、そして他の参加者と会話し、楽しみながらできるということ」と言う。梅田さん自身、一緒に清掃した学生とは次にキャンパスで会ったら挨拶するようになり、どんどん知り合いが増えている。「淀川掃除が、学生同士の交流に繋がっていることが何より嬉しい。作業中の雰囲気もとてもよくて、今となっては止められない活動です」雰囲気のよさはボランティアセンター内にも通じるものであり、梅田さんたち学生スタッフの気遣いや行動の表れでもあるだろう。

学生スタッフの活動は幅広い。2008年冬期からは大阪府茨木土木事務所、高槻市とNPO法人芥川倶楽部など市民団体が取り組んでいる芥川の『ミズヒマワリ駆除活動』への参加を決めた。特定外来生物であるミズヒマワリは、放っておくと川一面に繁殖して生態系を崩してしまう。地域の人と合わせて約40名が、川に入り作業を行った。「力も使うし危険もあるけれど、地域との交流ができてよかった。学生スタッフは関西大学にボランティアを広めるためにあるけれど、一般の人にもこんなボランティアがあることを知ってもらえたら」

先輩のなかには災害ボランティアに行った人もおり、刺激を受けることも多い。「私も、受け身ではなく自主的に参加しようという意識が芽生えてきました」今年、学生スタッフより「防災について調べるために現地に行きたい」という声があがった。梅田さんもそのひとりであり、夏休みに新潟と神戸、大阪の防災施設に話を聞きに行った。「新潟では中越沖地震の話を知り、映像も見ました。当時の被災地の日常生活や恐怖…、ニュース等で知るよりもずっとリアルに感じました。この経験は、学園祭の防災キャンペーンに活かすことができました」と

様々な活動を率先して行う梅田さんも、入学当初は知り合いがいなかったと言う。「私は人と接するのが大好き。授業を受けるためだけに大学に通うのではなく、多くの人と交わることができ、お互いにとってプラスと思える場は？と考え、学生スタッフになりました。『ボランティアしている』という意識はあまりなく、『やっていて楽しい』んです」最後に、梅田さんにとってボランティアとは何かと聞いた。「つながりやきっかけ、気付きを与えてくれる存在。大学生活の4年間、ボランティアを通じて多くのことを吸収したいと思っています」

課題のなかに目標を見だし、 “視聴者目線”の番組を作る

祭りの中継レポートに魅了され、
アナウンサーの道へ！

●朝日放送アナウンサー
橋詰 優子 さん —社会学部 1997年卒業—

ウィークデーの夕方、元気な笑顔とわかりやすい語り口で日々の最新情報を紹介する橋詰優子さん。ニュース番組のキャスターを務める一方で、アジアを紹介するトーク番組なども担当し、幅広く活躍している。アナウンサーとして心掛けていることは、「視聴者と同じ目線にいること、普通の人間であること、心身ともに健康であること」身近にある課題から、常に目標を見つけ邁進する橋詰さんの大学時代や仕事について話を伺った。



朝日放送「NEWSゆう+」での橋詰さん(左)

「お祭りが大好きで、なんでも“*いっちょかみ”するタイプなんです」大学2年生の冬、十日戎(通称:えべっさん)の福娘に選ばれて祭りに参加。その際、各局の女性アナウンサーが中継レポートしている姿を目にし、「お祭りを楽しんで、それを伝えるなんて、めっちゃおもしろそうな仕事！」と盛り上がり、アナウンサーになることを決意した。即行動を開始した橋詰さんは、学生リポーターのアルバイトに応募し、現場でリポーター業を学んでいく。…そして、「アナウンサーになれますように」と、えべっさんをお願いしたあの日からわずか2年後、橋詰さんは朝日放送のアナウンサーとなり、自らが十日戎の中継を担当することとなる。「あのとき見ていたアナウンサーの側に今、私が立っている！って、夢が叶い本当に嬉しかったです」

採用された理由の心当たりはと問うと、「実は朝日放送の面接ではあまり手応えがなく、駄目なのかなと思っていた」とのこと。しかし、入社後、関大に入学した際に感じたように「自分と波長が合っている」ことに気付いたという。「背伸びせず、大阪弁でしゃべる私をありのままの姿で受け入れてくれたのが朝日放送だったんです」関大と共通する自由な気質をもつ社風が、橋詰さんをより生き生きとさせているようだ。

橋詰さんは常に、与えられた課題のなから目標を見つける。入社して最初に語った夢は大阪オリンピックの中継レポートだった。残念ながら大阪でのオリンピック開催は実現せず、夢破れたちようどそのときに話を貰ったのが、中国をテーマにしたラジオ番組の担当。行ったこともない中国、話せない中国語…。「どうして私に？と、とまどいましたが、2008年に北京でオリ



橋詰 優子—はしづめ ゆうこ
■大阪府出身。大阪府立豊中高校卒業。1997年朝日放送入社。テレビ報道情報番組「NEWSゆう+」(月~金曜 午後4:50放送)やラジオ番組「橋詰優子のチャイナ!チャイナ!」(旧「橋詰優子のおはようチャイナ」)などの顔として活躍中。旅行や写真、中国楽器“二胡”、茶道など幅広い趣味をもつ。

ンピックが開催されることに気づき、目標を切り替えました」それからはオリンピックに向けて中国語を猛勉強。夢を実現するため、コツコツと企画を練り、北京オリンピックではテレビ、ラジオともに現地からレポートを入れることができた。一方、ゼロから始めたラジオ番組では、何も知らないからこそ可能な、視聴者と同じ「一般的目線からの中国」を紹介。リスナーからの評判も上々で、現在も続く息の長い番組へと成長した。

そんな関大人らしい“考動力”をもつ橋詰さんにも、失敗はあるという。そこからの復活法を聞くと「気にしないこと。私は鈍感な方なので(笑)、周りが自分のことをどう見ているか、どう思っているかということにはあまり気にせず乗り切ってきました」常に前向きな姿勢であり続けるコツとも言えそうだ。

就職難と言われる今の時代、後輩たちには「ただでさえ短い4年間なのに就職活動の時期も早まり、可哀そうだなと思います。でも、だからこそ、やりたいなと思ったことは恐れず、ためらわず、すぐに行動に移して欲しい。迷っている時間があったくないです。学生時代というのは、心身ともにとっても柔軟な状況にあると思います。関大という環境は、個性豊かな人が周囲にいっぱいいて、刺激もすごいはず。その恵まれた環境のなかで、少しでも興味を持ったことは、すぐに実践して欲しいですね」

*いっちょかみ…大阪弁で、好奇心旺盛で何事にも参加したい人の意。



■研究最前線

リーダーシップについてフォロワーの視点から研究

フォロワーの意識を
変化させ 依存しない関係へ

組織の中で、自主的に動くフォロワーを育てるには――

●商学部
小野 善生 准教授

20世紀初頭よりリーダーシップ研究が進められていくにつれ、リーダーシップとはリーダー(導く人)とフォロワー(ついていく人)の相互作用の結果により生成するものである、という見解が強まってきました。フォロワーが自己概念をどう変えるか、そのためにリーダーはどう振る舞うか。リーダーシップをフォロワーの視点から研究している商学部の小野善生准教授に話を聞きました。

■リーダーシップに欠かせないフォロワーの存在

――フォロワーシップとは？

フォロワーシップという考え方の起りはアメリカであり、「リーダーに頼らず自主的に動ける」、「積極的に批判ができる」ことをいいます。組織の成功はリーダーのみにかかっているのではなく、リーダーに従い、共に働くフォロワーの能力が大きく関わってくるということに着目した考え方です。

――なぜフォロワーシップが必要なのでしょう？

ここ数年、政治や企業において、失敗するとリーダーに責任を押し付けて首を挿げ替える傾向があります。責任はトップだけにあるのではなく、そのトップについて行った人、すなわちフォロワーにもあるはずであり、リーダーシップがリーダーだけの問題に済まされすぎているのが気になります。

また、社会が成熟して豊かになり、何もかも手に入る状態である今、手に入らなかったり不都合であった場合は、すぐ誰かに頼る傾向もあります。「あの人の言うことを聞いておけばいいや」とリーダーに“依存”するのです。リーダーが事をうまく運んでいるうちはよいのですが、うまくいかなくなると頼るべき人ではないと離れていきます。依存関係は短期的には機能しますが、極めて脆弱な関係であり、日本においてリーダーシップが機能しない理由の根本にそれがあると考えられます。

リーダーは組織のトップ、凡人にはなれないという位置づけにされがちですが、リーダーシップは特定の人間の問題ではなく、組織に関わる全ての人間の問題です。会社の部下に対してやコミュニティなどにおいて、いつ何時誰がリーダーになっても不思議ではないのです。

■フォロワーの意識を変化させ、成長を促す

――依存関係にならないために、リーダーはフォロワーにどう



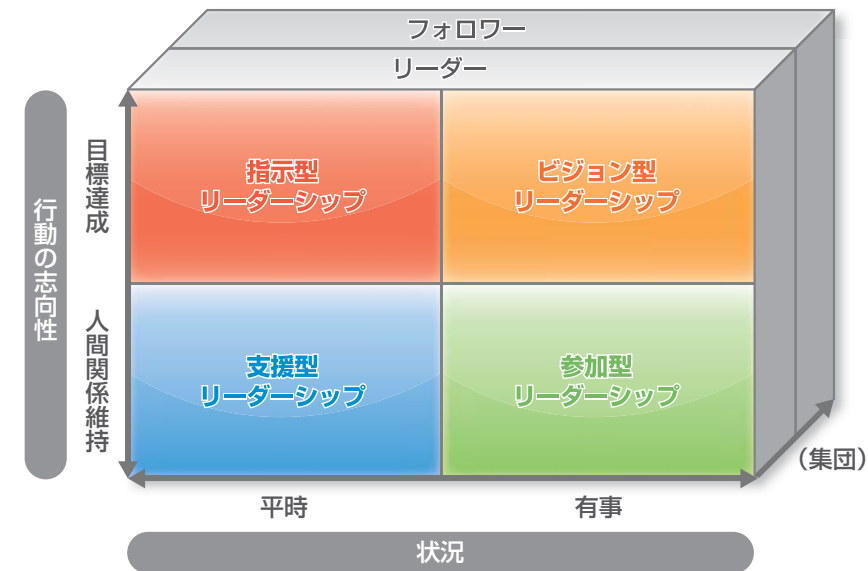
働きかければよいのでしょうか？

リーダーシップの根底にあるのは“変化”であり、目的達成に向けて協力するよう、フォロワーが意識を変えるよう促すことが必要です。問題なのは、変化がこれまで正しいとされてきたやり方の否定につながるということです。例えば、無人島で2人きりになった場合、魚の釣り方を知っている人は、釣り方を知らない人に魚を与えるのではなく、釣り方を教えてあげるべきです。釣り方を知っている人が死んだり事故にあった場合、残された人はひとり無人島のリーダーにならなくては行けないからです。“依存”は答えを与えてしまうこととなり、フォロワーの成長が否定されてしまいます。かといって一気に事を進めると、フォロワーのストレスが極致に達する可能性があり、リーダーはそのストレスをうまく調整しつつ、変化を促さなくてはなりません。

――リーダーにとって、変化の過程における問題とは？

一つは、新しい環境への適応を求められるフォロワーは、リーダーが先行きを明示してくれなければ不安になるということです。政治家が「〇〇のコストを25%削減する」と言ったとします。これだけであなたはついていきますか？これはビジョンではなくゴールであり、ビジョンたるには削減した暁にどういう国家が成り立っているのかまで明示する必要があります。先の見せ方が下手なリーダーに、フォロワーはついていきません。

もう一つは、一般的にリーダーシップ＝組織をひっぱっていく力というイメージがありますが、それだけでは駄目ということです。リーダーはフォロワーの能力を引き出して成長させることを考え、フォロワーが新しい環境に適応できるよう促すこ



- 指示型リーダーシップ――メンバーにさまざまな指示を出すことで組織をまとめる
- 支援型リーダーシップ――リーダーとは思えないような地味なリーダーシップを発揮し、結果として組織を円滑に運営している
- ビジョン型リーダーシップ――組織の危機に際して進むべき方向を示し、指針を打ち出し、組織そのものの変革を企てる
- 参加型リーダーシップ――組織の危機的状況にあって、バラバラになりがちなフォロワーを、変革に積極的に関与するように自発性を喚起する

リーダーシップ・ユニバース

小野善生(2007)「ライトワークス ビジネスベーシックシリーズ リーダーシップ」ファーストプレス、3ページ



小野善生准教授の著書「リーダーシップ」

とが必要です。指示命令を与えるのではなく、挑戦課題を提示、または問題に気付かせるというイメージです。その際、与える課題のレベルが高すぎるとフォロワーはなびかず距離は離れてしまいます。フォロワーが成長するためのヒントを与え、フォロワー自身に気付いてもらうよう振る舞えれば、より成熟した関係を築くことができます。

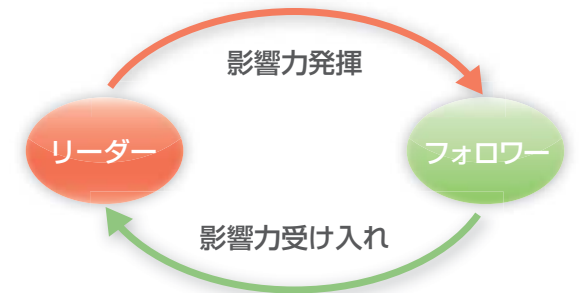
リーダーは、フォロワーに自己否定させる、先行きの不安を与えるという2つのリスクをとる覚悟が必要であり、フォロワーは自分の成長を実感し、リスクがあっても変わろう、この人なら信頼できる、この人となら責任を共有できる…というところまで積極的に問題に関与しなくては目的に到達できません。

■社会におけるリーダーシップの変遷

――求められるリーダーシップ像について。

経済が成長過程にあった時代、メインのリーダーシップは工場の経営、ブルーカラーをどうモチベートしていくかであり、仕事に関する確かな指示をし、人間扱いしてくれるリーダーが必要とされました。その後、オイルショックなどで世界情勢が不安定になり、80年代にアメリカに現れたのが熱狂的な支持者を従えるカリスマリーダーです。しかし、これは後が続きませんでした。そこで90～2000年代に始まったのが、リーダーシップはリーダーだけの問題ではなく、フォロワーシップがいかに重要であるかという研究です。リーダーの倫理性も問われるなかで、フォロワーの自己概念、フォロワーを積極的にどう意識変化させていくかということが、これからのリーダーの課題であり社会全体の課題でもあります。

リーダーシップの定義



リーダーシップは、共有された目的をリーダーとフォロワーが達成するための、リーダーの影響力発揮プロセスとフォロワーの影響力受け入れプロセスである

小野善生(2007)「ライトワークス ビジネスベーシックシリーズ リーダーシップ」ファーストプレス、20～21ページ

研究最前線

ナノ炭素材料の合成法確立と実用化を目指す

副産物が出ない
ナノ炭素繊維の合成法を開発

高密度な炭素繊維を生成し、多分野にわたる製品開発に役立てる

●環境都市工学部エネルギー・環境工学科
中川 清晴 助教



カーボンナノチューブ(左)と酸化ダイヤモンド

1960年代に出現した炭素繊維は、炭素材料の応用範囲を飛躍的に広め、工業的に様々な分野で利用されてきました。最近ではナノ構造を有する炭素材料が注目されており、その合成法の開発は発展途上の段階です。環境都市工学部の中川清晴助教は、マリモカーボンとカーボンナノチューブの新しい合成法を開発し、より効率よく高密度な炭素繊維を生成することで、製品開発の可能性を広げる研究に取り組んでいます。



新規炭素材料としてのカーボンナノチューブ

—まず基本的なことですが、カーボンナノチューブとは？
鉛筆の芯などに使われているグラファイト(黒鉛)をベースとする構造をもつ繊維で、グラファイトは通常、ベンゼン環が平面上に並んだグラフェンシート(Graphene sheet)と呼ばれる巨大平面分子が積み重なった構造をしています。新規炭素材料のカーボンナノチューブは、基本特性はグラファイトと同じで、そのシートが筒状になっています。一枚のシートで包まれたものをシングルウォールナノチューブ、木の年輪のように層になっているものをマルチウォールナノチューブと言います。外見は同じサイズの繊維でも、生成法や触媒により中の構造を作り分けることができ、構造が異なることで性質も変わってきます。
—どのようなものに应用されているのですか？
現在、盛んに研究されているのが燃料電池などの電極、キャパシタ、リチウムイオン電池、触媒担体、導電線あるいはトランジスタなどですが、物理的・化学的特徴を生かす製法で作るところまでは至っておらず、用途に関しても手探りの部分が多いのが現状です。

酸化ダイヤモンドを触媒とするマリモカーボンの合成

—どのような方法で炭素繊維を合成するのですか？
酸化ダイヤモンドの粉体を触媒の核(担体)として使用します。Ni, Co, Pdなどの金属を酸化ダイヤモンドの表面に担持し、触媒流動気相合成装置を用いてメタン分解反応を行います。すると、

ダイヤモンドを核に細かい繊維状の炭素が放射型にできます。これは天然のマリモと同じ構造をしているので“マリモカーボン”と呼ばれ、反応温度や時間を制御することで粒径を精密にコントロールできる可能性があり、大量合成も可能です。また、マリモカーボンは高密度にナノ炭素繊維が凝集されているため、切れて粉塵が散らばることもなく、化学物質の安全面からみても扱いやすいといえます。

—触媒担体に酸化ダイヤモンドを使うメリットは？
酸化ダイヤモンドは表面を酸素に覆われており、その酸素が規則的に並んでいるという特性があります。酸素の部分にだけ金属微粒子が付いて高分散に保たれるため、高密度のカーボンナノチューブの生成が可能となるのです。また、内部のダイヤモンドはカーボンであるため、生成物に不純物が含まれることなく、仕込みに対して10倍もの量を生成することができます。

液層法による高配向カーボンナノチューブの合成

—もうひとつの合成法は？
ピーカー内でカーボンナノチューブを生成します。アルコールや炭化水素などの有機化合物液体の中で、触媒を基板に乗せて通電加熱する方法です。液層の中で作るため、基板の表面だけが800~1000℃となって赤熱し、その基板上を垂直にカーボンナノチューブが成長します。反応が速いため1分間で数μm成長し、電力は数十Wでしか要しません。

この方法で生成されたカーボンナノチューブは一方に電子を放出するため、電界放出ディスプレイ(FED)などの電子放出

液層法による新規カーボンナノチューブの合成

Electrode
Alcohol Liquid
Substrate
Features
○ Simple system
○ Rapid (~10 μm/min)
○ Selective (No soot)
○ Various liquid alcohol sources (Methanol, Ethanol, Butanol, etc.)

Feed: Methanol, 1-Octanol
Catalyst: Fe
Temperature: 800-930 °C
(PCT/JP02/06235)

基板上に合成されたカーボンナノチューブ

a) SEM image of carbon nanotubes (4.0 μm scale)
b) SEM image of carbon nanotubes (4.0 μm scale)
c) TEM image of carbon nanotubes (5 nm scale)
Fig. SEM image of carbon nanotubes
Fig. TEM image of carbon nanotubes

酸化ダイヤモンド担体触媒の開発

Oxidized Diamond

マリモカーボンの構造

Hydrocarbon → Carbon nanomaterial + H₂

a) SEM image of marimo carbon (2.5 μm scale)
b) SEM image of carbon nanomaterials obtained by decomposition of CH₄ over NiO-diamond catalyst (2 μm scale)
c) SEM image of carbon nanomaterials obtained by decomposition of C₂H₆ over PdO-diamond catalyst (2 μm scale)
Scheme. Model of marimo carbon

源として使えるようになるかと考えています。

より高い選択率・転化率をめざして

—開発した2つの合成法と従来の合成法の違いは？
従来の合成法であるレーザーアブレーションやアーク放電法などは、大型装置を使用し、大抵は反応管全体を1000~3000℃にする必要がありました。時間とエネルギーがかかるうえ、反応部以外でも勝手に熱分解が起こります。また、生成物のほとんどは副産物(スス)で、その中をより分けて精製・分離するなどのプロセスを要するため、効率が悪くコストもかかります。また、抽出したカーボンはふわふわとして嵩の割には重さがほとんどなく、g・kg単位での入手は困難。生成物の向きも様々で、毛玉のようにになっている場合もあり、大量生産や選択的に必要な場合には適しません。

紹介した2つの方法は大量生産が可能であり、触媒や反応条件を選定することで、副産物を極少量に抑えることができます。

高密度な炭素材料を提供し、製品開発へ

—実用化に向けての課題と今後の展望について。
当面の課題は「製法を確立し、提供すること」です。カーボンナノチューブが世間に紹介されて10年経ちますが、未だ出回っていないのは大量生産ができていないということです。製法が確立していないものが多く、論文通りに合成しても同じ結果が得られない事実もあります。幸いにもこの2つの方法は、技術を訓練し、正確に操作すれば誰にでもできる合成法です。

カーボンナノチューブは軽量で優れた強度をもち、錆びません。現在使われている炭素繊維に代わることはもちろん、キャパシタや電界放出ディスプレイ(FED)材料、触媒担体、飛行機や自動車用部材、コンポジットへの応用など、多くの利用が期待されています。私たちは企業が求めている性能や用途も参考にして研究を進めていますが、製品開発の材料として必要としている人にカーボンナノチューブが行き渡っていないという現状をクリアすれば、用途は格段に広がるでしょう。また、化学的な視点からだけでなく、異なるフィールドの人たちが発案する用途、材料の可能性も興味深いところです。研究者として社会における製品開発に貢献するためにも、さらに無駄なプロセスを減らし、低コストで効率のよい合成法を確立したいと考えています。

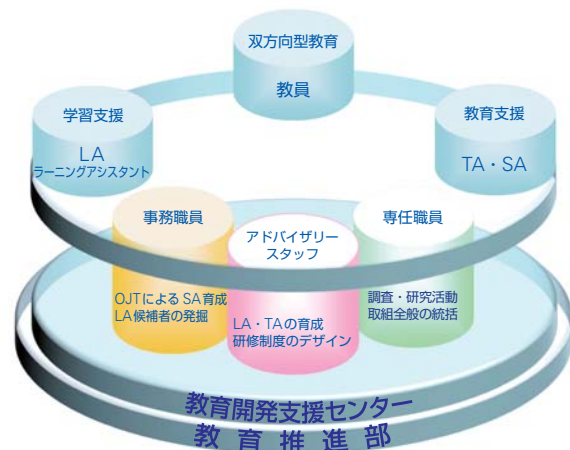


化学気相合成装置でCNT合成を行う

文部科学省プログラム

●平成21年度『大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム』に採択 三者協働型アクティブ・ラーニングの展開 —学生の「考動力」育成を目指して—

三者協働体制・概念図



●アクティブ・ラーニングを支援する 学部学生LAを育成

関西大学では自ら考え行動する力を「考動力」とし、その育成を促す教育方法に取り組んでいる。この「考動力」の獲得には学生の主体的な学習が不可欠であり、具体的な姿を学生自身がイメージできるよう、そのラーニング・モデルを身近な学部学生に求めた。これがLA(ラーニング・アシスタント)であり、学習の支援を担うファシリテーターとして、また既修者自らの成長の軌跡を伝えるメッセンジャーとしての育成を図る。

●教育改善・FD活動のパラダイムシフトを目指す

2008年に開設した初年次学生向け*1PBL型科目「スタディスキルを身につける」は、ノートテイキングや情報検索、レポート作成などの基礎的なスキルから、研究発表(プレゼンテーション・スキル)までを習得するための少人数ゼミ形式の全学共通教育の授業だ。LA育成の発想の原点は、このPBL型授業で教員支援を行うSA(チュードント・アシスタント)に志願する既修者の増加にある。このことは、学生が自らの受講経験を振り返り、能動的学習の価値に気づき、伝承する場を求めていることの顕れと言える。この要求に応えつつ、新たな学習の萌芽を育て、その裾野を広げるためには、学生の問題発見能力等の育成に軸足を置いた教育を展開し、学習支援システムを再構築する必要がある。教師の教育法を主とする従来の*2FD活動、すなわち“How to Teach”から、今後は“How to Learn”へとパラダイムシフトしなければならない。

●大学院学生スタッフを中核とした 協働体制の充実を図る

本取組では、PBL型科目の既修者から初年次学生の学習支援を担う候補者を発掘し、LAとして育成する。その研修制度の企画開発等を主に担当するのが教育学専攻の博士課程在籍者を中心とするAS(アドバイザー・スタッフ)だ。また、アクティブ・ラーニングの進展に向けて教育方法にも改良が求められ、それを授業現場でアシストするTA(ティーチング・アシスタント)の育成も必要となる。それらを踏まえ、LAが学生の学習を、TAとSAが教員の授業をそれぞれ支援するシステムを構築するために、ASを中核とした協働体制を組織する。

また、職員はOJTを通じてSAの育成やLA候補者の発掘に尽力するとともに、全学的な視野に立って協働を導く役割を担い、教員はASとの相互研修を担う。教育開発支援センターでは、この三者によるチームワークを基盤とする「TSネットワーク・プロジェクト」を立ち上げ、双方向型学習の定着と学生の知的成長を促し、「考動力」の育成を実現する。

取組担当者：三浦真琴(教育推進部教授)

*1PBL…問題解決型学習(Project Based Learning)の略称。
*2FD…教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称(Faculty Development)の略称。

教育開発支援センターをOPENしました！



本取組は教員・職員・学生が協働し、アクティブ・ラーニングの進展と教育改善・FD活動のパラダイムシフトを目指しています。

この三者が協働するオフィスが、教育開発支援センター(センター長：池田勝彦 化学生命工学部教授)として第2学舎に誕生しました。

本センターは、本学のFD活動の拠点として、高等教育に関するさまざまな情報を発信し、アクティブ・ラーニングを推進するなど先生方や学生諸君が気軽に立ち寄れる教育支援のコンビニ窓口を目指します。

なお、開室時間は、月曜日～金曜日の9時から17時までです。詳細は、次のアドレスにアクセスください。

<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

■社会貢献・連携事業／産官学・地域連携

チュラロンコン大学との学術協力及び 交流に関する協定締結



関西大学とチュラロンコン大学は、2007年3月に理工系の大学院生交換協定を締結し交流を続けているが、この度、大学全体での学術協力及び国際交流計画に基づき相互協力を行うことで合意に達し、10月5日に調印式を行った。今後は、それぞれの大学における研究・教育の推進及び研究者・学生、学術情報・資料の交換などを行う。

チュラロンコン大学は1917年に創立されたタイ最古の大学であり、タマサート大学と並ぶタイの最高学府。

法政大学と合同シンポジウムを開催

関西大学と法政大学は、9月26日千里山キャンパスにおいて第1回学生支援GP連続シンポジウムを合同で開催した。テーマは「ピア・サポートの取り組みと新たな課題」。平成19年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択された取り組みの一層の充実を図るべく、両大学におけるピア・サポートのこれまでの経緯や現状、今後のあり方などについて、両校の教職員や学生(ピア・サポーター)らが活発に議論を交わした。各校の取り組みは以下のとおり。

■関西大学：「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」

—関西大学で育む21世紀型学生気質—

■法政大学：「『学生の力』を活かした学生支援体制の構築」

—クラス・ゼミ(正課教育)、クラブ・サークル(正課外教育)に次ぐ『第3のコミュニティ』づくり—



全国社会保険労務士会と協定を締結

関西大学と全国社会保険労務士会連合会近畿地域協議会は、大学院への特別推薦入学試験に関する協定を結ぶことで合意に達し、9月14日、河田梯一前学長らが出席して調印式を行った。労働、社会保険関係の法令に精通する社会保険労務士の専門性を高めることを目的とし、平成22年度から、法学、経済学、商学の各研究科博士課程前期課程に、同協議会から推薦を受けた計20人程度を受け入れる。

社会安全学部、大学院社会安全研究科が同時認可

関西大学は文部科学省に「社会安全学部 安全マネジメント学科」と「大学院 社会安全研究科 防災・減災専攻」の設置認可申請を行い、10月30日付で認可書を受領した。

「社会安全学部」は文理融合型カリキュラムを配し、「社会災害マネジメントコース」と「自然災害マネジメントコース」に分かれ、安全・安心をデザインできる社会貢献型人材の育成をめざす。「大学院 社会安全研究科」は主に研究実績のある自然災害問題領域を取り扱い、学部との同時開設により研究教育面でのプラス効果に期待する。2010年4月開設で、場所はいずれも高槻ミューズキャンパス。

関西大学初等部入学試験を実施

10月5日から11日にかけて、関西大学初等部が新1年生の入学試験を実施した。男女計60人の募集定員に対し約4倍の志願者があり、親子面接・行動観察・ペーパーテストによる選考を経て、10月13日、合格発表が行われた。発表当日は、田中明文校長予定者から合格者全員に合格通知書が手渡され、午後からの合格者説明会には全員が出席。初等部教員の話に熱心に耳を傾けた。

12月には、関西大学初等部新2・3年生編入学試験を予定。

「日本の美とところ」をテーマに講演会を開催

関西大学文化フォーラムが10月3日、東京・有楽町のよみうりホールで開催された。「日本の美とところ」をテーマに、宮内庁陵墓課首席研究官の徳田誠志氏が「前方後円墳にみる日本文化」、画家の田村能里子氏が「絵の道は出会いの旅」、作家の辻原登氏が「歴史と冒険のシンクロニシティ」と題して講演。パネルディスカッションも行われ、約380人が参加した。

「日本の美とところ」講演会のポスター▶



大学トップマネジメントフォーラムに
楠見晴重学長が出席



東京・虎ノ門で開催された「大学トップマネジメントフォーラム2009」で各大学の学長・総長と議論を交わす楠見晴重学長(右)

『大学トップマネジメントフォーラム2009』が10月31日、東京・虎ノ門のニッショーホールにて開催された。「大学から社会への回答～変革期をタフに乗り切れる人材育成～」をテーマに、関西大学、神奈川大学、東洋大学、一橋大学、法政大学、明治大学、立教大学、早稲田大学の学長・総長が出席。基調講演は株式会社ドリームインキュベータ代表取締役会長の堀紘一氏による「新時代に企業が求める人材像」。パネルディスカッションでは「変革期をタフに乗り切れる人材育成」について、ジャーナリストの田原総一郎氏がモデレーターとなり、楠見晴重学長をはじめ各校の学長・総長が議論を交わした。

『ウェークアップ! ぶらす』公開シンポジウムを開催

来年4月、高槻ミュージックキャンパスに設置する社会安全学部の開設に先駆け、9月19日、千里ホールにおいて、読売テレビの報道番組『ウェークアップ! ぶらす』の公開シンポジウム「どうなる日本!? 都市の安全と安心～災害を知り、そして備える～」(本学協賛)を開催した。
当日は、竹中平蔵氏(本学客員教授、元総務大臣)、中田宏氏(前横浜市長)、岩田公雄氏(読売テレビ解説委員長)のほか、本学からは河田恵昭教授(環境都市工学部、社会安全学部長就任予定)、安部誠治教授(前副学長・商学部、社会安全学部長就任予定)が出席し、地震の脅威を軸に都市防災について語り合った。会場には約1,000人が集まり、熱心に耳を傾けた。

堺市で市民講演会を開催

関西大学は来年4月、大阪府堺市に「人間健康学部(設置認可申請中)」を開設する。この学部紹介を兼ねた市民講演会「健康で笑いのある心ゆたかな暮らしの実現」が10月3日、堺市民会館で開催された。基調講演は、人間健康学部長就任予定の竹内洋教授による「21世紀の大学」。シンポジウムは「人間健康学部がめざすものー健康づくり支援と地域連携ー」をテーマに行われ、人間健康学部就任予定の教授らが意見交換を行った。

高橋選手、織田選手
バンクーバーオリンピックに向けて好発進

10月10日、フィギュアスケートのフィンランディア杯で、右ひざ手術で約1年半ぶりに競技会へ出場した高橋大輔さん(大学院文学研究科)が故障明けの復帰戦を優勝で飾り、健在ぶりをアピールした。
続いて17日にはグランプリシリーズのフランス杯で、31日には中国杯で織田信成さん(文学部4年次生)が2連勝。12月に東京で開催されるグランプリファイナルへの出場が決定している。
来年2月のバンクーバー冬季五輪に向け、幸先のよい一歩を踏み出した両人。世界の実力者が顔を揃えるなか、4回転を飛ぶプログラムでの戦いが期待される。



バンクーバー冬季五輪への期待がかかる高橋大輔選手(左)と織田信成選手